

後漢書天文志：「漢靈帝中平二年十月癸亥客星 出南門中大如半筵五色喜怒稍小至後年六月消」

要旨：西暦 185 年 12 月に客星が南門〔星座〕の中にあらわれた。

後漢書東夷伝：漢靈帝光和中、倭國亂、相攻伐歴年、乃共立一女子卑彌呼為王。

要旨：漢の靈帝の光和中（178－184 年）、倭国は乱れ、何年も戦さを続けたので、卑彌呼という一人の女性を共立して王とした。

要するに、後漢書天文志は「西暦 185 年に客星現れた」、東夷伝は「倭国の大乱を西暦 178－184 年に卑彌呼が治めた」とあります。

卑彌呼は南の空低く、三日月より明るく輝く超新星に神のお告げ見たかもしれませんが。そしてそれを自身のシャーマリズム支配の確立に利用したかもしれませんが。

下図はこの超新星 SN185 のほぼ 2000 年後の X 線写真（「すぎく」で撮影）です。

